医療法人徳洲会　宇治徳洲会病院

データで顕著に浮かび上がった コロナ禍からの驚異的な回復ぶり 病院の高い潜在力を裏づけ

関塚永一
セコム医療システム株式会社顧問
国立病院機構埼玉病院名誉院長
慶應義塾大学医学部客員教授

1979年の開院以来、京都府南部の基幹病院として地域医療を支えている宇治徳洲会病院。「いつでも、どこでも、誰でもが最善の医療を受けられる社会の実現」を理念に掲げ、創設者である徳田虎雄氏の理想の医療を体現する。「セコムSMASH」で同院を分析すると、コロナ禍からの驚異的な回復ぶりが浮かび上がった。

Feature Points

- ▶ 京都府下の「最後の砦」。コロナ禍で立ち位置が明確に
- ▶ 救急応需率98%　病床利用率96%　病床稼働率104%
- ▶ 新規入院患者数はコロナ禍ですら、毎月100人ずつ増加
- ▶ 新入院はコロナ前より24%増え、在院日数は1・6日短縮
- ▶ 「患者満足度と病院満足度を上げなければ、生き残れない」

「生命だけは平等だ」を体現 救急医療体制の土台を築く

宇治徳洲会病院は開院から40年近くが経過した2015年、宇治市小倉町から約500m北東の槇島町に新築移転した。病床数を473床（現479床）に増床するとともに、回復期リハビリテーション病棟や緩和ケア病棟も新設。24年4月には高度救命救急病院の指定を受けた。民間病院でありながら、重要な公的役割も担う関西地方でも屈指の総合医療機関だ。

救急医療を24時間体制で提供し、救急搬送受け入れは04年以来、京都府のトップを誇る。救急医療の土台を築いたのは心臓センター長、救命救急センター長などを歴任し、新病院が竣工した年に就任した末吉敦院長だ。塩崎忠一事務部長は「寝食を忘れて家にも帰らず、病院に泊まり込み、24時間365日、患者さんの対応をしていました」と末吉院長の入職当時を振り返る。

末吉敦院長

すえよし・あつし●1985年岡山大学医学部卒業後、宇治徳洲会病院で研修。心臓センター長、救命救急センター長を経て、2015年に院長に就任。日本救急医学会救急科専門医、日本循環器学会循環器専門医。

1991年に救急受け入れ用携帯電話を導入。勤務中、携帯肌身離さず診療にあたった末吉院長は「救急が好きだったのです。昼間に来院される重症の患者さんは基本的にすべて診るスタンスで仕事をしてきました」と救急への熱い

塩崎忠一事務部長

図1　コロナ後の病床規模別の延べ患者数の推移（「セコムSMASH」トレンド機能より）

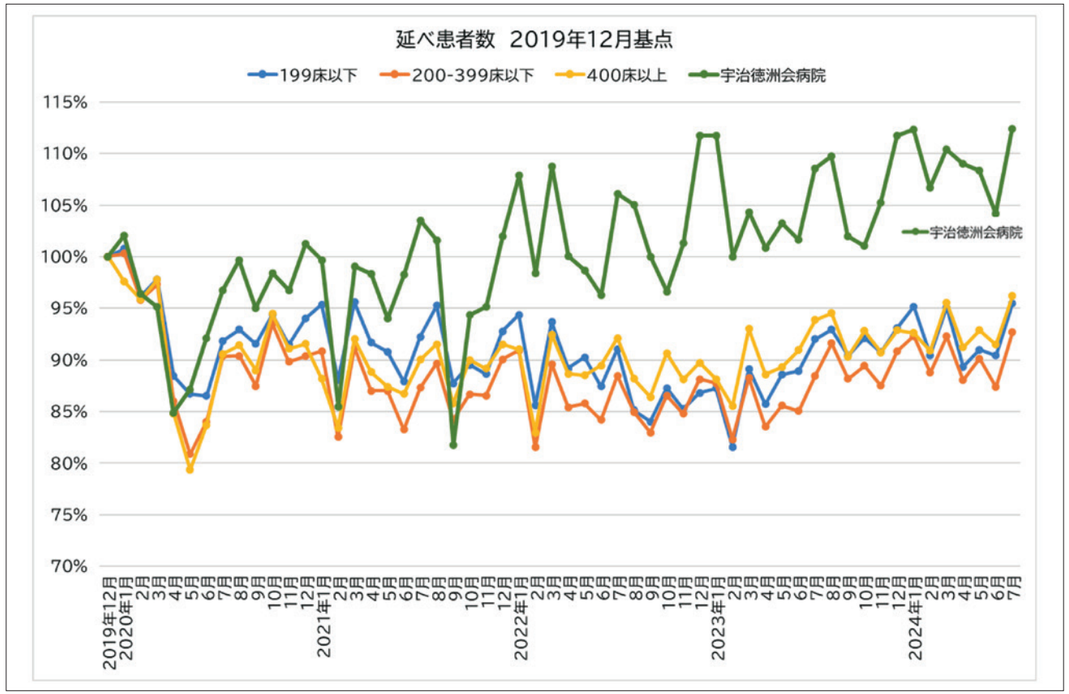
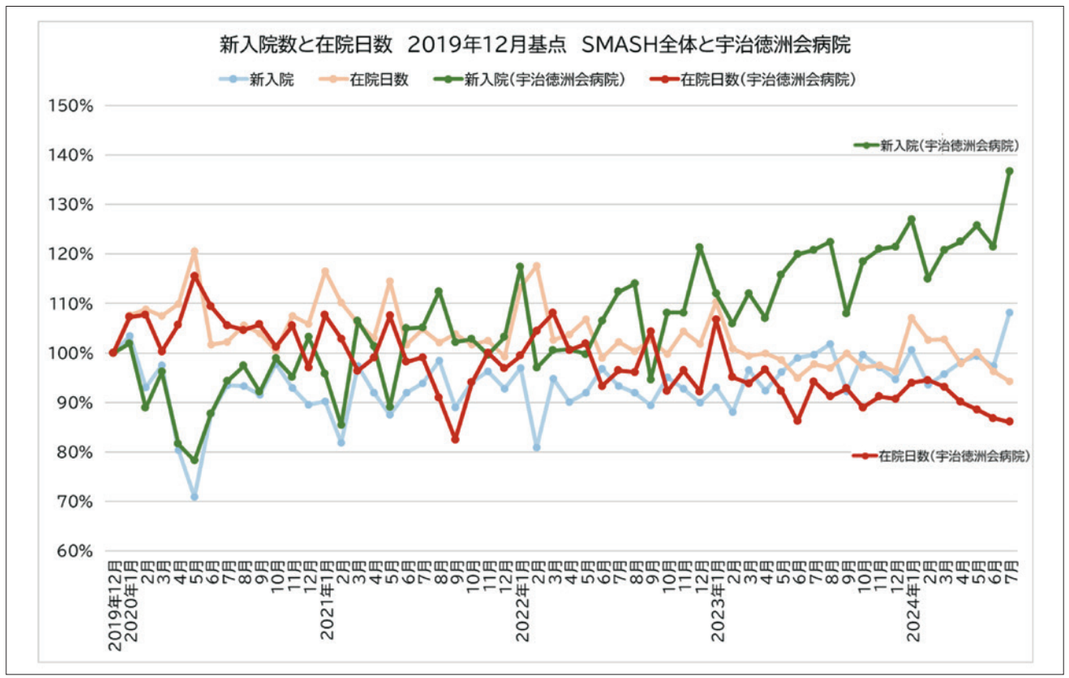


図2　コロナ後の新入院患者数と在院日数の推移（「セコムSMASH」トレンド機能より）



▶ 続きは、本誌4月号をご覧下さい

© 2025 日本医療企画